作業療法学における主観／客観の二項対立を超えたアプローチ方法の開発
―認知症により意思疎通の難しさがある人の生活行為成立に関する現象学的記述分析を通して

田島明子*,[1]、石原孝二[2]、大江良信[3]
[1]聖隷クリストファー大学、[2]東京大学大学院、[3]グループホーム広尾

【はじめに】　作業療法は、人が生きていくなかで行う様々な活動の可能化を支え、その人らしく生きていけるように支援することがその専門性とされる。そこで、作業療法では対象者が興味や価値を抱いている生活行為（作業療法ではそれを「意味ある作業」と呼ぶ）を実現することで、「その人らしさ」を支えることができると規定している。しかし、より重度の認知症の人の「意味ある作業」を支えることは２つの点から困難を伴う。1 点目が、疾患の進行により、できる活動がだんだんと減少していくこと、2 点目が、本人の意思がわからないこと、である。だが、認知症の人の生活行為を支えることは現実的に行われている。それを言語化するには、これまでの作業療法学における客観、主観の枠組みからは捉えきれなかった、客観、主観の間、それを繋ぐ現象を捉える必要と考える。客観、主観を繋ぐ糸口として筆者は「身体」に着目をしたい。認知症の人とケアを行う人との相互作用には身体が基点としてあるように感じられることがあるからである。そのため現象学の著作のなかでもメルロ＝ポンティを参照することとした。メルロ＝ポンティは、社会的な相互作用における意識の志向性に対して知覚や行為の作動に関連する身体に着目した論考を多数残している。認知症の人は、まるで身体に意思が宿るように感じられる場面があるが、認知症の人の意識の志向性とケアを行う人の意識の志向性は身体を介在し、どのように絡みあっているのか現象学的視点からの記述・分析を試みたい。また客観、主観を繋ぐ現象を捉えることは作業療法学にとってどのような意味があるのか。本研究の意義は、従来の作業療法学において evidence とされてきた活動・行為能力（客観）や意思（主観）の限界を明らかにするとともに、二項対立化した evidence を乗り越える新たなアプローチ方法の発見の可能性を示せることにある。

【対象と方法】　①現象学的な認知症研究の先行研究を行い、メルロ＝ポンティの代表的な著作（『知覚の現象学』（みすず書房）、『目と精神』（みすず書房）、『行動の構造』（みすず書房）を参照し、認知症者の「生きられた経験」の現象学的分析視点を抽出する。②認知症ケアの現場の参与観察によるフィールドノートの作成とそれを基にした分析：研究フィールドは、A 認知症グループホームである。対象者と家族、ケアスタッフの相互作用をビデオ撮りし、メルロ＝ポンティの現象学的身体論に依拠しつつ解釈を行う。

【結果・考察】　本研究では、メルロ・ポンティが提起する「二重感覚」「沈殿」という志向的概念を用いて、認知症の人とケアを行う人の間身体的世界の記述を試みた。「二重感覚」とは、私たちの身体運動と世界が「浸食」しあう関係を現し、「沈殿」は、私たちの行為群の基盤としてある意識下に沈み込み過去化した生の諸活動を現す概念である(澤田,2012)。重度化するほど、認知症の人にとって生活は他者との「二重感覚」的世界から成立すると言える。また、認知症の人は、「沈殿」した過去の経験層、生の諸活動の基盤が時に全く喪失してしまったような戸惑いを見せることもあるし、一方で現在との照合を間違えてしまったかのような場違いな行動を行ったりすることもある。時には思い出話しに突然涙を見せたりし、「沈殿」した記憶は身体に閉じ込められ、言葉により表出することが困難なだけなのかも知れないと感じられることもある。そうした認知症の人の生活行為から推し量れる「「沈殿」した層との乖離感・距離感」は、認知症に対する「自己を喪失する疾患」、あるいは認知症の人の「自己は残存する」という物語生成を周囲に駆り立ててきたのかもしれない。しかしこうした自己の捉え方は、客体に働きかける方向性のみを持つ自己像であると言え、主体と客体を分断する人間観である。このような人間観はケアやリハビリテーションの実践知を構築する際に次のような問題を呈すると考える。①「病が健常な生活の劣化ではなく、それ自体で生命体の生の形を表現している」視点を見失う、②人間の「身体の豊かさ（二重感覚）」を基盤にしたアプローチ法を開発できない、である。